

かかりつけ医の先生方へ

胃がん術後の合併症に対する対処について

症状は患者さん個人で異なるため、治療方法に関しては、特に規定や制限は設けておりません。ご使用になる薬品など、日常、先生方が処方されている内容で治療していただくのが最も良いと考えます。以下に通常胃がんの術後に外来で遭遇する機会の多い症状について、一般的に行っている患者への指導内容および対処方法をまとめましたので、参考にさせていただければ幸いです。

食事摂取について

胃切除術後の食事摂取の方法は、施設により若干異なりますが、術後4日～5日目より流動食ないし三分粥や五分粥の分割食(3食の間、10時と15時(と20時)に軽いおやつ)で開始し、全粥食を50%以上摂取できる状態となる術後10日～14日をめどに退院としています。退院前に栄養指導を行っており、①よく噛むこと、②食事量は少しずつ、ゆっくりと増やすこと、③1回の食事量は少なめに、補食(2～3回の間食)で補うこと、④栄養のバランスを考えること、⑤水分摂取を十分に行うよう注意することを指導しています。食事内容についての制限は行っておりません。栄養状態が悪化するような場合は栄養剤や輸液などで補います。高齢者など退院後に栄養状態が極端に悪化して食事摂取が困難となり、経腸栄養や高カロリー輸液を施行する必要がでてくる場合がごくまれにあります。

アルコール・嗜好品について

胃切除後は、アルコールが早く吸収されるため酔いやすくなります。量を少なめにして少しずつ時間をかけて飲むよう指導しています。また、炭酸飲料やビールは、炭酸でおなかが張って食事の量が減ってしまうことがあるため、控えめにするよう伝えています。

ダンピング症状

早期・後期いずれのダンピング症状に対しても、食事摂取方法を工夫するように指導することで対応しています。

●早期ダンピング

食後すぐ(30分ほど)に起こる動悸、発汗、めまい、眠気、腹鳴、脱力感、顔面紅潮・蒼白、下痢などの症状が出現します。高濃度の糖質を多く含んだ食事が急激に小腸に流れ込むことが原因とされますので、流動性の高い甘味の強い食事や消化吸収の良い糖質(うどんやパスタなど)を避けるように指導します。食事時の水分摂取を控えるのも良いとされています。症状が改善しない場合は一回の食事量を減らし、分食回数を増やすことを勧めています。

●後期ダンピング

食後2時間ほど経ったところに突然の脱力感、冷汗、倦怠感、めまいなどの症状が出現します。食後の一時的な高血糖の後の低血糖が原因とされますので、症状発現時は糖分の摂取を、予防策としては食後2時間くらいに間食としておやつを食べてもらい、食後の際の糖質を少なめにとってもらうように指導しています。

投薬について

●鉄剤・ビタミンB12の投与

経過中、鉄欠乏性貧血や大球性正色素性貧血など貧血症状をきたした場合、鉄剤、ビタミンB12製剤の内服療法を行っております。内服治療に反応しない症例に対しては注射薬で対応します。内服薬は通常量を処方しており、血清鉄、ビタミンB12血中濃度が安定していれば、市販のサプリメントでも対応できる患者さんも多く認めます。

●逆流性食道炎の治療薬

逆流性食道炎については就寝時の上半身挙上(10~20度)を指導しています。胃全摘後で逆流症状が著明な患者さんに対しては、タンパク分解酵素阻害薬(メシル酸カモスタット)の投与を行っています。タンパク分解酵素阻害薬投与でも症状が軽快しない場合は、プロトンポンプインヒビター(PPI)や粘膜保護材が有効な場合もあります。

●消化剤・制酸剤

胃もたれ感や腹部膨満感などの症状に対して処方しています。使用薬剤については特に規定は設けておらず、各症状に応じた治療薬を投与しています。

●止痢薬または緩下剤

胃切除術後に長期にわたって下痢または便秘症状が持続する場合があります。術後早期では自然軽快することが多いと思われませんが、長期間持続する症状に対しては各症状に応じた止痢薬または緩下剤を使用します。

緊急対応

●イレウスへの対応

胃がんの術後の外来経過観察中に緊急の対応が必要になるのは主にイレウス症状です。イレウスは初期治療が大切になりますので、腹痛、嘔気などのイレウス症状が出現した際にはすぐに診察を受けるように指導しています。診察、各種検査でイレウスが確定した場合、基本的には入院の上、治療を開始します。症状が極めて軽微な場合には輸液、1~2食の絶食で経過観察して良いかと思いますが、できる限り入院をお勧めしています。

●胆石、無石胆のう炎

胃切除後には通常より胆石ができやすくなります。また、術後比較的早期には、無石胆のう炎を起すこともあります。有症状の胆石は、胆のう摘出術(開腹胃切除後でも腹腔鏡下胆摘が可能の場合もあります)の適応です。胆石発作や胆のう炎が疑われる場合には、エコーで確認して治療を開始していただくか、病院への受診をお勧めください。